

デーノタメ遺跡の調査成果 2017

北本市教育委員会 坂田 敏行

今回の調査は、過去に行われた調査で明らかにされなかった遺跡の内容を確認するための学術調査です。調査区は、A～E 区の 5 区に分けて設定し、約 310 m²を対象に実施しました（図 1）。

調査は、①中期集落（約 5,000 年前）の形状を確認する（A 区）、②中期集落から低湿地（水辺空間）に至るアプローチの状況を確認する（B 区）、③中期集落の東に接する低位面（テラス面）の遺物包含層の状況を確認する（E 区）、④後期集落（約 3,800 年前）の所在する台地上から低位面（テラス面）に至る土層の堆積状況を確認する（C 区）、⑤低地における後期泥炭層の遺存状況を確認する（D 区）、ことを目的として行いました。

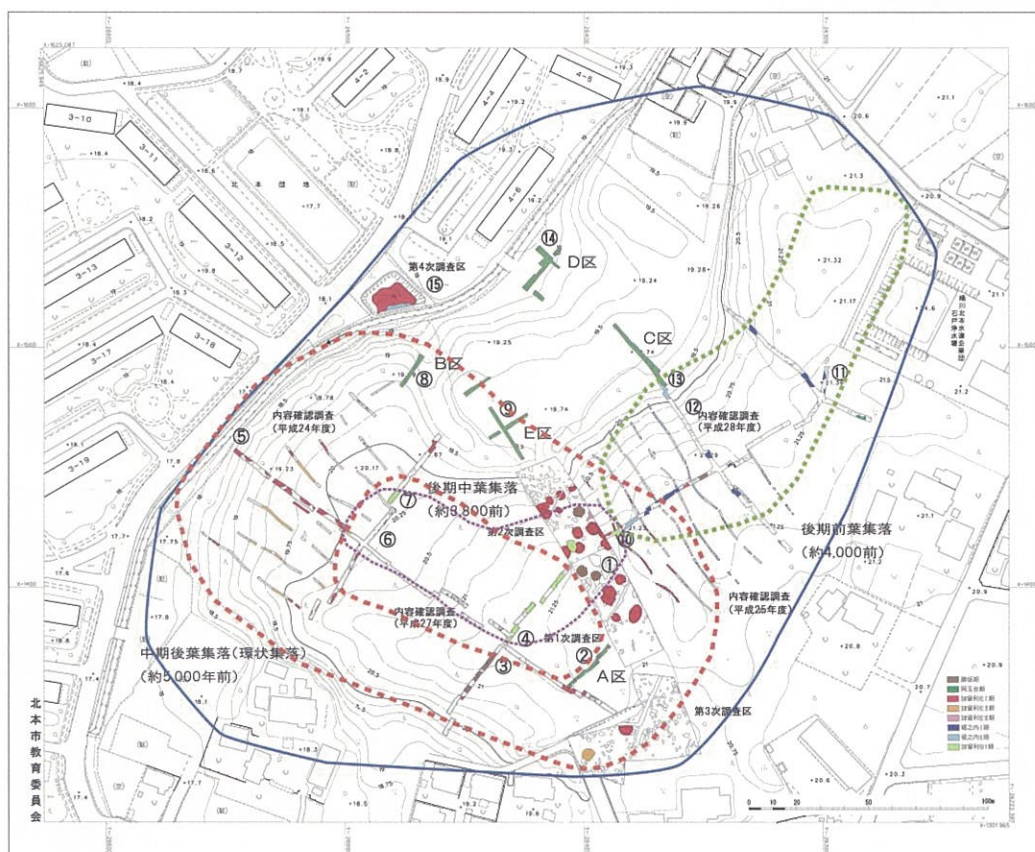


図 1 デーノタメ遺跡全体図

それぞれの課題に対する調査結果は、以下のとおりです。

- ① これまで調査が及んでいなかった集落の南部において、中期後半と想定される竪穴住居跡を確認しました（図2）。これにより、集落の形状は「馬蹄形」ではなく「環状」であることがわかりました（図1）。
- ② B区では、縄文時代に遡ると思われる道路状遺構を検出しました（図3）。これは、台地上の集落と低地部の水辺を結んだ通路としての遺構である可能性が考えられます。
- ③ 中期集落の直下のテラス面では遺構は確認されませんでした。大きく2層の遺物包含層が確認され、上層からは後期および中期の遺物が、下層からは中期の土器が集中して出土しました（図4）。この状況から、このエリアは集落で破損した土器を廃棄した「土器捨て場」であった可能性がうかがえます。
- ④ 後期集落がある台地上からテラス面にかけてトレンチ（試掘溝）調査し、台地から低地に至る土層の堆積状況を確認しました。その結果、これまでの調査で「粘土層」と認識していた基盤層が、実は関東ローム層が水



図2 検出された竪穴住居跡（A区）



図3 道路状遺構（B区）



図4 遺物出土状況（E区）



図5 後期土器の出土状況（C区）

に浸かって脱色、粘土化したものであることがわかりました。また、台地直下の斜面には後期の土器が集中しますが（図5）、テラス面では遺物の出土が希薄で、遺物を伴わない土地利用がうかがえました。

- ④ D区では、基盤となる粘土層の上に、遺物を含む砂層と焦茶褐色泥炭層が残存していることを確認しました（図10）。砂層中からは縄文時代中期の土器（漆塗土器を含む）や後期の土器、クルミ核やトチノキ、クリ、昆虫遺体などが出土しています（図6～9）。焦茶褐色泥炭層からは主に縄文時代後期の土器（堀之内Ⅰ式、加曾利BⅠ・Ⅱ式）が出土し、ここが縄文時代中期を含み後期を主体とする水辺空間であったことが確認できました。なお、出土したクルミ核のほとんどは自然に割れており、第4次調査で検出されたクルミとは性格が異なるものでした。当時、付近にはクルミ林が存在していたと想定され、自然落下のクルミ核を検出したものと推測されます。

以上のように、今回の調査では新たに後期泥炭層を確認したことを始め、デーノタメ遺跡の実態を明らかにするための重要な成果を得ることができました。



図6 泥炭層と遺物の出土状況（D区）

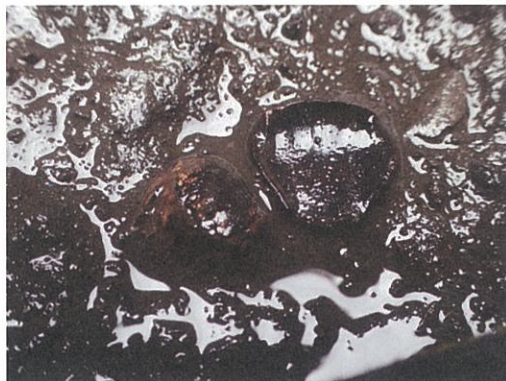


図7 クリの出土状況（D区）



図8 出土したヒメコガネ（D区）



図9 漆塗土器の出土状況（D区）

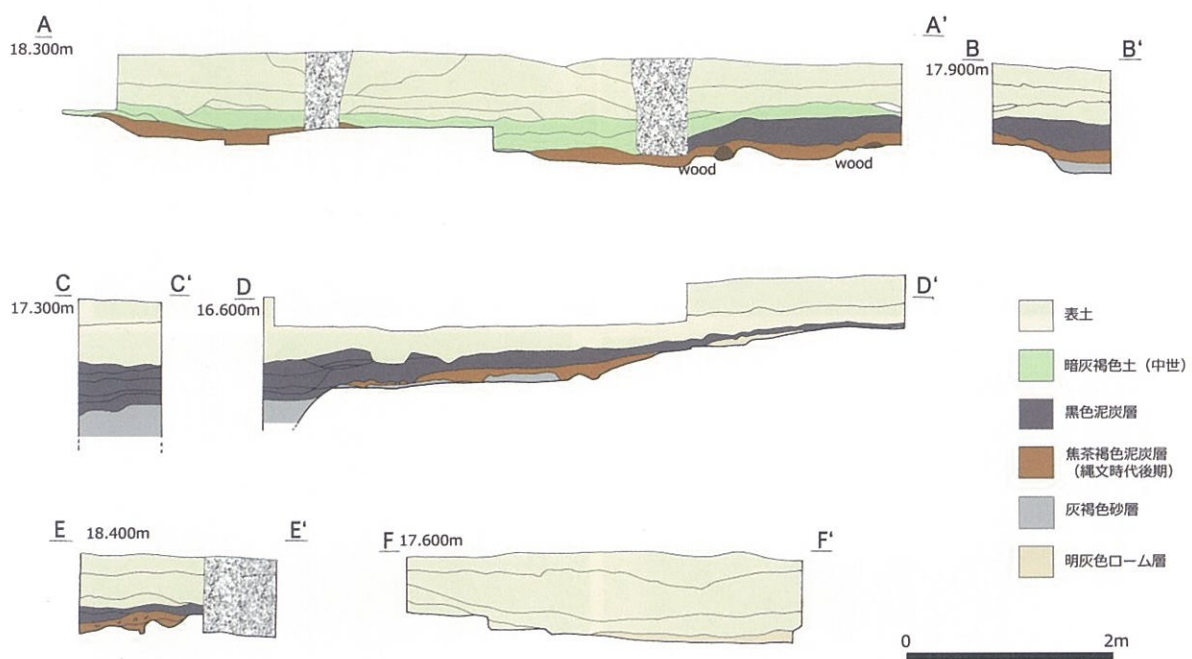
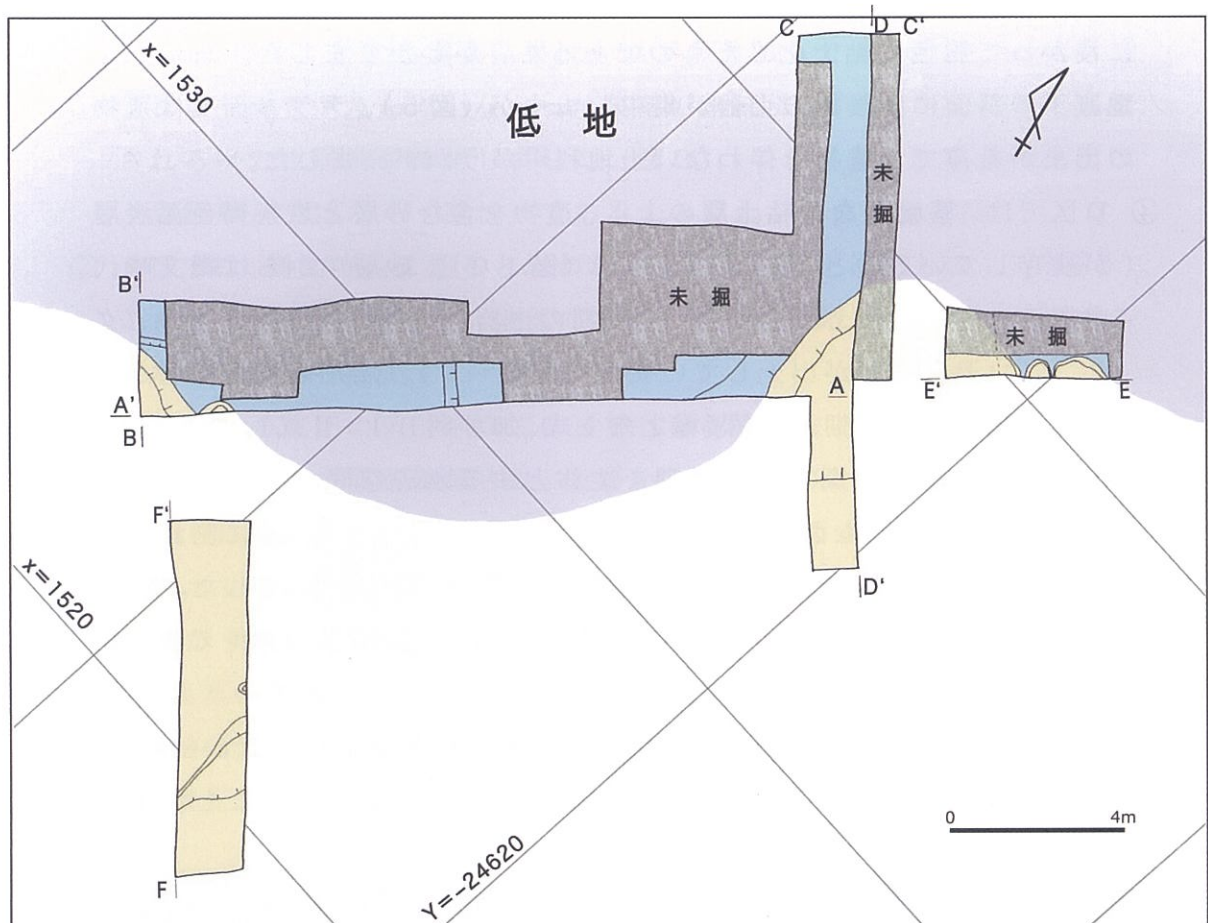


図 10 デーノタメ遺跡全体図